

論考

総幼研の教育システム（型）から、 これからの子どもに必要な力を考える

パドマ幼稚園研究担当 須賀みな子

1 幼児教育を取り巻く状況

これからの幼児教育のあり方を考える上で、今の幼児を取り巻くいくつかの状況を、簡単に見ていきます。キーワードは3つです。

ひとつめは「少子化のさらなる加速」という問題です。総務省発表のデータによると、子どもの出生数と、15歳から64歳までの労働人口の減少が、今後さらに加速していくことが予測されています。出生数もずっと減少傾向が続いていきますが、40年後にはさらにそれが現在の半分程度にまで大きく減ると予測されています。40年後といいますが、かなり先のようにも感じられますが、現在新任の先生や2年目・3年目の先生方が、まだ先生をしていらっしゃるかもしれないくらいの、近い未来の話でもあります。これは、これからの幼児教育を考える上で、避けては通れない大きな変化です。

キーワードふたつめは、「働き方、知の評価軸の変化」という問題です。キーワード1であげました少子化により人口が減り続けるということは、社会で働く労働人口の減少につながっていきます。その結果、今の子どもたちが働く労働環境はどうなっていくのかと考えますと、まずほとんどの仕事で効率化できる部分がどんどん効率化され、現在人手をかけた行なっている事務的な仕事自体が、職種として消滅していく可能性が高いとされています。コロナ禍のここ1年で、私たち大人の働き方も大きく変化し始めていますが、そのような「働き方の変化」が、今の子どもたちの時代には、より加速していくことが考えられます。

また、時代が要請する労働のかたちというものは、

学校教育における知の評価体系をも連動して変化させていきます。その時代の労働のかたちにフィットするような学び方が、時代に合った「知のあり方」として学校教育では評価されます。一部はもう変化し始めています。たとえば、最近の話で言いますと、センター試験から大学入学共通テストへの変更や、指導要領改訂による分野横断的な知識のあり方へのシフトといった変化がすでに起こっています。

子どもたちに求められる「知のあり方」の変化と同時に、それをどう評価するのかという、教育する側や社会の側のものさしのあり方もまた変化します。今の大きな方向性としては、一発勝負のペーパー試験で知識量を測るというタイプから、何年か継続して見ていく学び方の変化や、知のアウトプットの幅広さなど、子どもたちの取り組み過程や思考過程を重視するタイプの評価方法へと、大きく舵を切っている最中だと言えます。

3つめのキーワードは「環境の変化」です。学びのスタイル、自然環境のあり方、働き方や生き方のモデルといった、子どもの生活を取り巻く多方面の環境が大きく変化しています。特に学びのスタイルに関しては、このコロナの影響で、幼児教育の段階でもオンラインの取り組みや、対面での活動におけるルールの変更など、各園でご苦労があったのではないかと思います。しかし、コロナが去ったからといって、また何十人でひとつのクラスに集まるというスタイルが、必ずしも戻るわけではないと予測されます。非対面型の教育方法も、選択肢のひとつとして今後さらにかたちを変えながら残っていくだろうと考えられています。

自然環境についても、暑さや寒さの変化幅が年々

大きくなり、今まで通りの季節の活動や園の行事なども、その時期や内容の変更を迫られているのではないかと思います。働き方や生き方に関してもより多様になっていく中で、それを身近なロールモデルとして見て育つ子どもたちにとっては、今までと同じような環境の中で生活が続くわけではないということを、多くの場面で感じながら生きていくことになると考えられます。

2 社会状況の変化の幼児教育への影響

では、こうした子どもを取り巻く3つの大きな変化が、幼児教育においてどのような影響があるのかという視点で考えてみたいと思います。まず順番に、「少子化のさらなる加速」という問題から考えてみましょう。この問題の子どもに関わる影響として、「子ども集団」そのものが保育施設や学校などでないとなかなか出会えないものになり、「集団で何かをする」という経験自体が非常に貴重なものになってくるということです。また、幼稚園や保育園、こども園にとっての影響としては、生き残りをかけた各園の特色の鮮明化や「保育の質」の向上を、きちんと見えるかたちでオープンにしているかなど、園ごとの取り組みが今以上に重要になってくることにつながってきます。

次に、「働き方、知の評価軸の変化」という問題は、それが子どもや園にどのような影響があるか考えてみます。子どもたちは知識を身につける際に、より多くの知識を積み上げるというよりも、多様な経験を通して知識への関心を広く育てていくことが大事になるという、価値観の転換の中で園や学校生活を送ることになると考えられます。また、一人で完結する活動だけでなく、周りの友だちと関わって行う活動がより重視されることにもつながってきます。園にとっては、子どもの興味関心をより広くしていく働きかけが重視され、子どものさまざまな取り組みについても、その結果だけでなく、取り組みの過程＝プロセスを適切に把握し、記録や評価につなげ

ていくことが求められるようになるといった変化が考えられます。

キーワード3つめの「環境の変化」によって起こる子どもにとっての影響としては、さまざまな「変化」への対応力＝「切り替える力」が必要になってくることが挙げられます。自分の周りの保育環境や家庭環境において、友だちがたくさんいる場面、あるいは一人で行う場面など、異なるその都度の環境に対し、自分自身をチューニングしていく、つまり切り替えて楽しめるようになることが、「スキル」として必要になってくるだろうということです。それらは、自分の気分を自分で立て直す「自立心」や、新しいものに関心を持って向かう「好奇心」によって支えられるものでもあります。

園にとっての影響としては、ICTの活用や防災情報のアップデートなど、保育実務とダイレクトに関わらない分野に対して、保育者自身が積極的に参加していくことが重要になってくると考えられます。その改変の内容そのものだけでなく、変わっていく環境に対して、保育者自身が積極的に関わって対応する姿勢を子どもたちに見せていくことも、たいせつな役割になると言えるのではないのでしょうか。

3 新たな幼児教育の課題から見た、総幼研の教育システム（型）

では、これらの新たな幼児教育における課題に対して、総幼研園が共通して持つ教育のシステム（型）というものを重ねて見てみると、何が見えてくるのでしょうか。

まず、総幼研の教育の大きな特徴である、「集団での活動をたいせつにした保育」という点から見ていきます。一般的に、子どもたちが集団で活動することの意義として、集団に自分を合わせていく経験による「協調性」の獲得や、集団と競い合うことで個々の能力を引き上げていく「競争心」を養うことなどが、今までの知のあり方の中では評価されてきました。「集団でこそ個々の力が伸びていく」という総幼研の教育観にも、そのような見方が含まれていると

と思いますが、今後は少し違った角度から、総幼研の「集団での活動」の意義を見出すことができると考えます。

そもそも、少子化が進行していく中では、「子ども集団」に出会い、「集団での活動」が経験できるという、総幼研の保育のスタイルそのものが、子どもの育ちにおいて価値ある特色です。それも、ただ集団で過ごすことができるだけではありません。友だちの姿をヒントに何かに挑戦していく経験から「自立心」が育てられたり、友だちと自分との関係を調整していく経験から「協同性」が養われたりと、「集団での活動」という同じ形式の保育であっても、社会状況等の変化に応じた、今までとは別の側面から見るその活動の意義が重要となってくるのです。これは「活動」の変化ではなく、「活動の捉え方」の変化であると言えるでしょう。

同じように、総幼研の「テンポよく繰り返される日課活動」についても見ていきましょう。今までは、日課活動自体の楽しさを提供するだけでなく、現実的には古今東西のさまざまな知識の蓄積が期待されてきた側面もあるのではないかと思います。これもまた、「活動の捉え方」を変化させてみるとどのような意義が見出せるのでしょうか。今後より重要になる側面として、知識の蓄積よりは、さまざまなことばや文化、歌などの背景にある日常では出会えないような世界観に触れる機会という意味で、より重要な活動となる可能性があります。

また短時間ごとに次々と活動が展開される中で、活動ごとのルールや集中の度合いなどを、子どもたちがその場の展開に合わせて切り替えていくのですが、こういった要素が組み込まれている点でも、環境への適応力が重視される今後は、より意味深い活動であると言えるでしょう。

4 総幼研の幼児教育と「10の姿」

ここまで取り上げてきた、これからの幼児を取り巻く状況の変化と総幼研教育のシステム（型）が提供できる経験の新たな視点とを、教育要領や保育指

針にある「10の姿」と重ねて再度振り返ってみます。この「10の姿」はどれも、幼児期における十全な発達において必要な視点や働きかけのヒントになるものです。この10の項目の中で、少子化が進む現在、多くの友だちと出会える総幼研の園という環境でこそ育てていくことができる姿としては何が考えられるでしょうか。このような視点で見ますと、「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」の3つが、家庭においてよりは園において、少人数の個別活動よりは集団での保育の場面において育つてくると想定できます。

「10の姿」の中から取り出したこれら3つの姿というのは、今まで総幼研の園が育ててきた子どもの姿と、これから子どもたちに育てていく必要がある姿との共通する部分であると捉えることができます。「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」は、より日常的な言葉である、「頑張る力」「切り替える力」「集中する力」にすると、その内容が捉えやすくなります。たとえば、子どもが「頑張っているな」と保育者が感じる場面はどういう場面が多いのかを考えてみると、一人で身の回りの準備に取り組んでいるシーンであったり、集中して友だちの声を聞きながら歌っているシーンであったりするように思います。これらは「自立心」や「協同性」に関わる姿です。また、自分がしたいと思う何らかの欲求と、その場所のルールや他者の思いなどが対立するような葛藤の中で、何とか折り合いをつけて心を切り替え、ルールを守り、他者の思いをたいせつにするような判断をする場面も、子どもたちの成長を感じる場面であるかと



【図1】 2歳児 瞑想（6月）

思います。これは「道徳性・規範意識の芽生え」に関わる場面であると言えます。これらの保育場面での子どもは、「自分で自分がある程度コントロールして切り替えている状況にあること」「集中して活動しているということ」「自分自身で頑張ろうと感じていること」という共通点が見出せます。「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」を、総幼研の教育においてよりフィットする、「頑張る力」「切り替える力」「集中する力」として捉えることで、こうした特徴がより掴みやすくなるのではないかと思います。総幼研の教育が持つシステム（型）によって今まで子どもたちに育ててきた、そしてこれからの幼児教育でより一層たいせつになってくるこれら3つの力について、ここからはパドマ幼稚園での観察研究をもとに考えていきたいと思います。

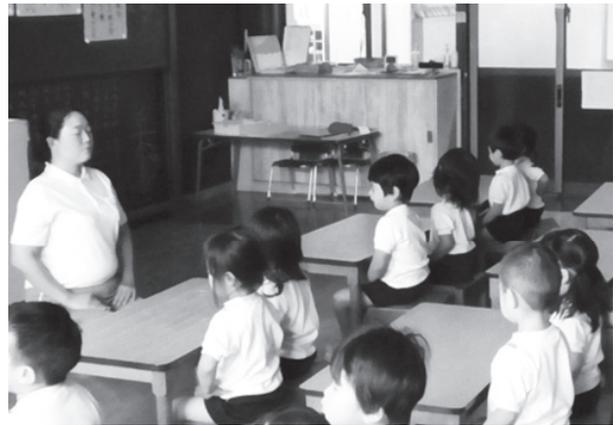
5 パドマ幼稚園での観察研究から3つの力を考える

5-1：2歳児瞑想

まず、最年少2歳児の朝の瞑想の場面を取り上げます。筆者は2歳児のクラスにおいて、朝の瞑想の場면을約1年間、継続的に観察しました。その中で、子どもたちの振る舞いがどのように変化していったのかということを手掛かりにして、園児が瞑想を経験することの意義について考えてみます。子どもたちの瞑想の姿は1年を通して変化していきましたが、それは「動きたい」「目を開けたい」といった欲求を



【図2】2歳児 瞑想（9月）



【図3】2歳児 瞑想（2月）

自分で調節していく姿の変化過程でもあったと言えます。

観察初期の6月には、瞑想の場面で目を瞑って静かに過ごす、ということ自体があまり見られず、前で瞑想する先生をじっと見ていたり、友だちと向き合って話をしたりする姿が見られました（図1）。

それが徐々に変化するのが、夏休みが明けた9月頃です。この頃は、目をぎゅっと瞑り、指を鼻に当てて「シー！」と声を出して言ったり、片目を開け、片目を瞑って、他の子どもに「シー！」と言ったりする姿が頻繁に見られました（図2）。この場面からは、瞑想を行う際のルールである「目を瞑ること」や「静かにすること」がこの時点では理解できており、それに自分自身が従いたい気持ちと、目を開けたい気持ちや声を出したい気持ちとが葛藤していることが見て取れます。

もうすぐ年少に進級する2月には、瞑想のルールや手順を理解した上で、短時間であれば、そっと目



【図4】2歳児 瞑想から朝の挨拶

を瞑り、静かに落ち着いて過ごせる姿が見られるようになってきました(図3)。そこでは、葛藤の中でも、静かに目を瞑るために必要な身体や心のコントロールに、ある程度慣れてきていることがわかります。また、瞑想後に大きな声で返事や挨拶をして、身体を動かしたり声を出したりする活動のルールへと切り替える姿にも、この時期にはより静と動のコントラストがはっきりと見て取れるようになってきます(図4)。

保育の中に、瞑想の時間が組み込まれていることによって、子どもたちが無理のないペースで、少しずつ自分の欲求と向き合い、葛藤し、欲求を調節する経験をしながら、一定の時間集中することができるようになっていく姿が捉えられました。

5-2 : 5歳児絵画

では次に、年長5歳児の絵画の場面を取り上げて考えてみます。園での活動の中で、絵画は各園の理念に沿ってさまざまな手法で行われる一般的な保育活動ですので、総幼研園の共通の活動ではありませんが、絵画に向かう子どもの姿からは、総幼研の教育システム(型)により育つ力を見いだすことが出来ました。

観察で取り上げた5歳児の絵画の場面は、四天王の像を見ながら、その姿を箸ペンと墨で描くという活動です。その中で「対象をじっと見る」、そして「自分の画用紙を見つめて線を描き、また観察対象に視点を戻す」ことが時間いっぱい繰り返されています。



【図5】5歳児 絵画



【図6】体育ローテーション(並んで待つ)

対象を設定して描くこのような絵画においては、そのかたちや模様、イメージなどをそこから掴み取るまで、対象を見続ける集中力が必要となってきます。この間の「視点の移動」というものは、幼児期の子どもたちにとっては気を散らす要因にもなるのですが、ここでは気を散らす様子は見られず、対象と手元の視点移動が集中を切らさずにスムーズに行われています(図5)。

一般的な幼児期の発達の観点から見ますと、「対象をよく見てそのもの自体をリアルに描く」という絵画のスタイルは7歳以降頃に見られるとされます。ですが、今回観察をしてみると、総幼研の日課活動によって先生の姿といった対象を集中して見ることの多い年長児においては、見て描くという活動がスムーズに行われているようでした。ここでは、「見る」と「描く」との作業の切り替えをする力や、その視点の移動の間も継続して集中する力などが表現されていることがわかります。



【図7】体育ローテーション(自分たちで片づける)



【図8】 体育ローテーション（右端男児：ちょっと休憩）

このような対象を見る力、「見ること」と「描くこと」の切り替えの中でも継続的に集中してやりきる力のベースとなるものは、総幼研の教育が持つシステム（型）により培われた力であると感じられます。

5-3：5歳児体育ローテーション

3つめは体育ローテーションの活動についてです。総幼研の園で毎日行われている体育ローテーションについて改めて考えてみたいと思います。この活動において、子どもたちはいったいどのような経験をしているのでしょうか。

こうした視点から見ると、まずは「身体づくり」や「あそび」としての楽しい経験という部分が挙げられるかと思いますが、それだけではありません。自分で「やるぞ」と気持ちを切り替えたり、奮い立たせたりしながら、「あとちょっとだけ頑張る」とい



【図9】 体育ローテーション
（右端男児：あとちょっと頑張ってみよう）



【図10】 体育ローテーション（右端男児：頑張って登れた！）

う経験や、「並んで待つ」という経験、そして「終わったらサッと切り替えて、使用したものを片づける」という経験など、これからの幼児教育において必要とされる力につながる要素の多い活動であることが見えてきます（図6・図7）。

観察の中で見られた体育ローテーションの日常的な一場面として、のぼり棒に取り組む年長男児を取り上げてみます。のぼり棒には、すでに何人かの4歳児や5歳児の子どもたちがおり、そこに5歳児の男児がやってきます。まず棒の下3分の1くらいの場所まで何とか登りますが、そこで少し休憩しているような素ぶりを見せます（図8）。その後何度か、ちょっと疲れたのかジッと止まるのですが、隣の棒に登る子をちらりと見て、触発されたように、「もうちょっと登ろう」と自分自身を立て直して頑張る姿が見られました（図9・図10）。

このような場面は、体育ローテーションに取り組む総幼研の各園においては珍しいものではなく、日常的に見られる姿ではないでしょうか。「もっと頑張りなさい」「休まず上まで行きなさい」といった、先生など他者からの直接的な指示によってではなく、自分なりに自分を奮い立たせて、「あとちょっとだけ頑張ろう」と思うことができる力というのは、身体づくりや運動能力の向上以上に、体育ローテーションで育てることができるたいせつな力であると言えるのではないのでしょうか。

6 総幼研教育をベースとした 多様な保育の可能性

では最後に、これからの幼児教育における総幼研教育のシステム（型）が持つ可能性について、各園の独自性と総幼研教育との関係性という視点から総括してみたいと思います。瞑想や体育ローテーションなど、総幼研の園に共通した教育のシステム（型）による保育には、ここまで考察してきたように、子どもたちにとって、感情や欲求をある程度自分自身で調節する「切り替える力」、「あとちょっとだけ頑張ろう」と自分自身で「頑張る力」、集中してよく見てよく考えるような「集中する力」を育てる機会が豊富に含まれていることがわかりました。これらの力は、今後の社会環境を生きていく上でより重要となってくる力となります。また、このような力の育ちを提供する総幼研教育のシステム（型）と、各園がそれぞれに行なっている保育とをうまく融合させ、それを言語化することは、少子化が進むこれからの社会の中で求められる「保育の質」の向上と、各園オリジナルの魅力の可視化へつながるものになると言えるでしょう。

総幼研園で共通の教育システム（型）をベースにして、その土台の上に各園それぞれの特徴がありますが、この両者の関係性をどのように捉えるのかということが、保育全体の質の向上に関わってくると考えられます。総幼研の日課活動とは全く関わりなく、別のものとして園独自の活動が並行して行われるのではなく、逆に日課活動などで培っている力を試し、表出する経験を担保する視点を持って、各園独自の保育が展開されることによって、子どもたちの育つ力はより一層向上していくと言えるのではないのでしょうか。

また、保育者自身にとっても、日課活動などでの場面における子どもたちの姿と、それ以外の活動の中で子どもたちの姿とを一貫したものとして往還的につなげて見ることで、保育者としてのスキルは大きく向上します。子どもたちの育ちを「往還的に

つなげて見る」とは、どういうことなのか。目の前の子どもたちが総幼研のカリキュラムの中で育つことによって、たとえば「集中して瞑想ができる」「歌が上手に歌える」「高い段の跳び箱がとべる」など、さまざまなことが「できる」ようになりますが、「できる」ことそれ自体を目的に置いて保育にあたるものではありません。子どもたちがそういったことを「できる」ようになる、そのこと自体が、子どものどのような力につながっているのか？ それが「できる」ことを「通して」何を育てるのか？ という、何層かに重なったフィルターを通しながら「先の風景」を見ることで見方が変わります。たとえば、言語日課で先生をよく見て模倣する力や、集中して瞑想できる力というのは、絵や作文を書く際の、「ものをよく見る力」「観察する力」「途切れない集中力」へとつながっていくと捉えられます。また、みんなで音程を合わせて音楽日課でうまく歌える力は、「タイミングを合わせる」「波長を合わせる」といった経験の積み重ねでもあり、複数の人数でパッと楽しく遊ぶことができる「協同性」につながっていく、という風に見ていくこともできます。目の前の活動における見えやすい力だけでなく、それを身につけることを「通して」どんな力が育っていくのか？ と、少し先を見通す多層的な視点を持って保育にあたることにより、総幼研の教育のシステム（型）と、各園の独自の保育文化とがより一層うまく融合していくことと思います。

変わらぬ安定感を持つ総幼研の教育システム（型）と、時代の変化を見通しながら、その時々子どもたちに必要となる力とを往還していくことで、これからの時代を生きる子どもたちに必要な力を育む保育の可能性が大きくひらかれるのではないのでしょうか。